

ホームレス・ひきこもり支援

県大教授ら講演会 南国市

ホームレスなどの生活困窮者や、ひきこもりの人の支援の在り方について考える講演会が6日、南国市で開かれた。県内で支援活動を行う2人が「まずは存在を受け止めることが大切」などと呼び掛けた。

高知県立大社会福祉学部の田中きよむ教授(60)は、代表を務めるNPO「こうちネットホップ」の夜回りや困窮者が一時的に入居できるステップハウスの状況を説明。県内のホームレスは2020年の国の調査で0人とされたが「地方では、場所を移動して人目に触れないように過ごすケースが多い。目視では判断できない」と調査と実態との乖離を指摘した。

ホームレスとひきこもり支援の在り方を考えた講演会(南国市明見のサザンシティホテル)



立し居場所がないというひきこもりの心象風景は、ホームレスと似ている」と語った。さらに、支援が就労を目的にすると能力主義に陥ってしまうと危惧し「話をとことん聞くのが先。自分の言葉で自分の夢や目標を語れるようになることが本当の自立だ」と強調した。

田中教授は「働くことが一人前という価値観がある意味、病理のように染みついている」と社会の変容を期待。山田代表は「自力で問題を解決できるようになるまで長期的に寄り添うことが必要だ」と、自立を強要しないよう求めた。

講演会は、全国隣保館職員四国ブロック研修会の一環。四国各地から約100人が参加した。

(新妻亮太)

ひきこもり支援に30年以上携わる「エスポワール高知」の山田孝明代表(70)は「社会から孤